

「生産調整に関する研究会」の大化け

平成14年11月29日、最終とりまとめの研究会での感動的な締め座長あいさつの中に「(行政と系統間の)不信感の根っこを取り払って欲しい」旨の発言があった。正にこの事が私の研究会に関わる契機であったので感慨深く聞いた。平成13年の米対策決定過程の詳細は別に譲る。平成13年秋も深まりつつある頃、政治プロセスが本格化する中で、稲作経営安定対策における主業、副業的農家の扱い、数量による調整手法の導入の2点を巡り、行政、系統が激突した。私は既に一民間人であったが、双方の関係者とは以前から仕事を離れてのお付き合いを続けていたので、それとはなしに双方の考えそして隔たりの大きさを痛感していた。双方の立場、苦勞の程が解るだけに辛い思いをしたことを今更のように思い出す。行政がブロック説明会を開催、対抗して系統が大動員をかける、正に感情的対立に至るに及んで、流石に私も双方の関係者に「今年は14年産の事だけ決め、他はじっくり詰めた方がよいのでは」と水入りを求めた。結果として平成13年11月22日「米政策の見直しと当面の需給安定のための取組について」を政府、与党、系統が合意した。

一方、改革が待ったなしの状況にあることは行政、系統とも共通の認識であった。ここで足踏みしては「新たな米政策大綱(平成9年11月)」が目指した、稲作経営安定対策から本格的な経営所得安定対策へ、数量による調整手法への転換、需給情報伝達を農業者まで徹底することを通じ農業者・農業者団体の主体的取組による需給調整システムへの転換、この3点の実現ステップに支障が出るとの強い懸念を抱いた。先述した平成13年11月22日の合意で、研究会設置は位置付けられてはいるがその明示的な検討事項は、数量管理への移行に伴う技術的手法の検討と計画流通制度の見直しの2点。これでは水田農業政策、米政策全般の見直し検討など到底出来ない。

そこで私は謀りに謀ってこの研究会メンバーになる、また研究会の目的は表面上11月22日合意に沿わなければならないが、論議の進展状況いかんではより幅広い検討が出来るようにしておく、この2点の実現に邁進した。更に研究会の運営について、「研究会主導の研究会」であること、すべて公開とすること、現場の意見を聞くことをお願いした。私がこのようにすることに固執したのは、行政、系統間に生じた溝の深さ、不信の根を実感していたからでもある。そのため私自身は黒子に徹し役割を果たす、これは私の美

学であると思ひ定めた。周囲の人からは、何を好んで厄介な事に関わるのかとか、「珍種」の敬(?)称も賜った。

平成14年1月18日に発足した研究会では、私はこれまでの政策すべてを聖域を設けることなく分析、検証すること、思い込みを排除すること、その上に立って共通認識を醸成すること、の3点を強く主張した。改革待ったなしの共通認識があったことから、ラージパッケージで論議、検討が行われることとなり、4月には流通部会、生産調整部会が設置された。既設の企画部会をはじめ各部会における精力的な論議、検討が進められる中、生産調整部会において、事務局から提出された膨大な客観的資料と各委員からの提案などを基に部会長が整理した「米政策の総合的検証と対応方向(部会長メモ)」が5月14日出され、以降は、研究会、各部会がこの部会長メモをベースに更なる詰めの論議を行うこととなった。6月7日生産調整部会長再整理メモ、6月25日流通部会における整理ペーパーが出、いよいよ大詰めの段階を迎えるに至った。6月28日は大臣からの一定の方向を出して欲しいとの期限であり、研究会(各部会委員全員参加)は開始早々緊張感に包まれた。委員相互の論議、修文を経て、10時間に及ぶ会議も、「米政策の総合的検証と対応方向(米政策の再構築に向けた中間とりまとめ)」として結実し、システムの具体的手法についての「宿題」が事務局(行政)、系統に出された。

10月17日の宿題返しから第2幕に入った。特記すべきは、余り米処理対策を行政、系統の共同作業でとりまとめたこと、農業者・農業者団体が主役となるシステムへの移行時期が、行政、系統協議で実質合意されたこと(この点については両者でまとまらなければ研究会として提示する準備をしたが徒労に終わり本当に良かった)。残された大きな課題は、構造政策の観点から農地を農地として利用するとの農地制度の見直し、総合的な経営政策就中経営所得安定対策の明確な位置付け、が出来なかったこと。とまれ、11月29日、政治プロセスにおける大臣の強力なリーダーシップが功を奏し、研究会として「水田農業政策・米政策再構築の基本方向」をとりまとめることができた。この研究会の果たした役割の評価は第三者に委ねるが、最大の事は行政、系統の真摯な取組と協力が21世紀の政策づくりと政策の実行に欠かせないことを示したことだと思う。これまでの行き掛かりを捨て、是非貴重な経験を活かす体制をつくりあげて欲しいと切に願うものである。

(株)農林中金総合研究所理事長 高木勇樹・たかぎゆうき)